

落窪物語の方法

上坂信男

まえがき

一の 1

本稿では『落窪物語』作者の技法の特殊性を明らかにするために、民話あるいは平安朝初期物語文学中の継母子譚との関連や克服の跡を、一、作中人物の形象の面と、二、物語の構造の両面に分けて考察したい。『住吉物語』については、別稿を参看願いたい。が、改作が試みられ、変貌したものが、現存本であるとしても、本稿に必要な事項すなわち、人物配置や継母に対する報復譚が非常に簡単であるという点に関しては、原『住吉』の佛を伝えて居り、その成立は諸家の推定されるように、《五十嵐力博士『平安朝文学史』下巻・松尾聰博士『落窪物語』(『日本古典文学大系』)解説》『落窪物語』より古いとの立場に立つて取扱う。民話についてはこれも時代とともに成長変化するのが常であるにしても、骨子においては瀬源が可能であり、その面の研究も進んでいるので本稿ではそれら民俗学界の研究成果に依存しながら論を進めることを特に記しておきたい。(なお引用文は『日本古典文学大系』『落窪物語』(新弘教社)と、(古典文学『住吉物語』(室左文庫本))『源氏物語』(室左文庫本)による。)

まず、当時の継母子譚として『落窪物語』と『住吉物語』、それに民話に伝えられる人物配置をみるに、

	父	母	継母	加担者	本子	恋人	庇護者
落窪	中納言	王家統	素姓不明	典業助	中君・三郎 次郎・太郎	左大臣子 近少将道頼	阿漕・帶刀 三郎君
住吉	中納言兼左衛門督	先帝姫宮	諸大夫女	主計頭	中君・三郎	右大臣子 位少将	住吉尼
藤福	米福		継母		妹米福	町者の長	山の爺 お婆
お銀	父		継母		妹		妹父
手無娘			継母			長者の男	

というような次第で、民話にも『住吉物語』にも共通することは継子が本子より年上であるということ、後妻の生む子が年下であるのは当然と考えられるけれど、また王朝貴族のばあい、家格出自の貴いものが正妻の座につくことを思えば、継子が妹の立場にあることもありえてよいと思われる。しかし、継子の結婚でハッピーエンドになる形式をとるとき、姉妹を継子にするのが当然であろう。民話と『落窪物語』との類似といえば、お銀小銀系で継子に同情する妹と落窪姫君に対する三郎君の存在が注意される。

2

『住吉物語』と『落窪物語』とを比較することによって、もっとも明瞭に『落窪物語』の方法を知ることができるので、まずはその人物設定の面から、稍詳細に検討してみよう。

お銀小銀系を除いては民話において登場しなかった父親が、しかも同じ中納言として登場することが、まず注目される。ただ両物語の父親が、お銀小銀系の継子譚にみるように継子をかばう役に廻って、積極的に活躍していないのは、父親の登場が単に中流貴族という社会的背景を物語に結びつけるためとみられ、『落窪物語』のばあいは、さらに後日の孝養譚で大きくクローズ・アップされるのが新しい意図であった。とにかく、父親が継母子間の実情に疎かったことが、継母子の家庭悲劇の必要条件になっている。

第二の共通点としては、これも民話においては何ら触れることのない実母の出自が、物語では明白にされ、しかも『先帝の姫君』

といい、「王家統」といって、両物語で似て居り、しかも継母よりも高貴である。この点は『落窪』の中納言の北の方は出自が明白でないけれど、七十歳になって、せいぜい従六位上の典藥助を伯父に持つくらいだから、いずれ中流貴族、それも『住吉』と同じに諸大夫の女なのであろう。したがって、既に指摘されているように『野口元大「落窪物語論叢書」』『日本文学』一九五九・四など、旧来、巷間に見聞流布伝承されて、あるいは記録に載り、あるいは民話となっていた継母子に関する説話群を周知の前提としてゐるからこそ

北の方いかなる心やおはしけん
と何の説明も加えることなく物語を展開することができたと考えられているのだが、この物語の発端の部分にしもて、

北の方二人をかけてなん通ひ給ふ。一人は花めく諸大夫の女なり。今一所は古き御門の宮にておはしける

と明白に二人の妻を出自の面で比較している『住吉物語』と同じように、『落窪物語』のばあいは実母の死の直後から始めて、「三十四の君にも裳着せ奉」ろうという叙述から、二人の妻の併存していた時代の短くないことを暗示する方法をとっているが、いずれにしても、出自のよい実母に対する羨望嫉妬の念が継母の胸中に鬱積したことが想像され、実母の死後、その娘の姫君（継子）に対する虐待となって炸裂したものと考えられる。こうした妻妾の間の摩擦が継母子譚にとって絶対条件であることは自明のことである。

ところで、道頼の母、左大臣の北の方の口を借りて

人(妻)数多持たるは歎き負ふなり。身も苦しげなり。なもし給ひそ(二三五頁)

といい、「……君だちは花やかに御妻方のさし添ひてもかしづき給ふこそ、今めかしけれ……」という乳母に対しては、道頼をして「古めかしき心なればにやあらん……」(二六五頁)と真向から否定させていることから、『落窪物語』の作者が「一夫一婦の結婚観を唱えているとみる事ができるし、それについてはこれまでもしばしば論及されていたことであるけれど、こうした結婚観は、継母子の悲劇を、極く身近に見聞した作者のこの種悲劇の解決策として胚胎してきたのではないだろうか。一度は面白の駒と結ばれた四の君が、後に道頼の仲媒で筑紫帥に再婚し、三の君の夫であつた蔵人少将が道頼の勳勝で道頼の妹中君の簪に迎えられるという事実を挙げて、作者の一夫一婦の結婚観を否定する説もあるが、前者は再婚しても継母子の悲劇の起る心配はなく、後者では四の君との間に子が無いという事実をも考え合わせれば、そしてもっと本質的には、両者ともに事実上一夫多妻でないことを思えば、作者の思想に継母子問題を惹き起さないための「一夫一婦主義」の結婚観があつたとみることは認められるべきものであらう。

第三も共通点として、姫君に想いを懸けるのがともに大臣の子の少将であることを挙げる。民話の長者あるいは長者の息子に当るものとして、少将が選ばれたのには少将の地位をめぐつてある種のイメージ(官職意識)があるのだらうということだけを指摘しておきたい。(侍従を主人公とする古住吉説については別稿参照) 第四は姫君を異敵するものについてであるが、一方が住吉に住

む尼を慕つて父の邸を出るのに、他方では救い出されるまで家に居て阿漕の世話を受ける。『住吉物語』は手無し娘のばあいと同様継子の流離を忠実に伝えているものであるけれど、落窪姫君の二条院への救出は大幅改変されているとみななければならない。また、民話において、超自然的なものの援助を受けることに比べれば『住吉物語』の尼は現実性を具えてくるが、それでも長谷寺観音の霊夢を受けてめぐりあうという宗教的神秘に置き変えているだけともいえる。そこへいくと、『落窪物語』で、阿漕が単に忠実な侍女としてでなく、姫君に対する少将の懸想に対応して、少将に仕える帯刀を夫に持つという構図は、当時の事実素材を得たかと思われ、後の『堤中納言物語』中の「ほどのほどの懸想」の先蹤とみられるほどに現実性を持っている。

つぎには、女主人公についてであるが、「光るばかりなる姫君」として生まれ、成育するにつれて、「光射し添ふ心地して見え給い」、「此の世の人とも思へず、傍光る程にぞおはしける」と形容されている『住吉物語』の女主人公設定の方法は、それが「大阪住吉の大念仏寺を本拠する連衆の語り口なのであつた」(『石上堅』『発想中世文学史』一八六頁)がためかどうかは別としても、すでに指摘されているように記紀以来の伝統ある発想なのであつて、物語史の世界に入つても、『竹取物語』の赫奕姫、『宇津保物語』の主人公たち、下つては光源氏に至るまで、継承されて来、行つたものである。

ところが『落窪物語』のばあいはどうであらうか。女主人公落窪姫君は、

この君の容貌は、かく（北の方が）かしづき給ふ御女などに劣るまじけれど……（巻一・一四頁）

と容儀の叙述も誇大でなく、いかにも如実の行文である。全篇を通しては多少理想化されている印象を受けないではないけれど、こうした設定にあたっての叙述にも写実的な『落窪物語』の本質の一端を思わせるものがあるが、典薬助の設定は「層この作者の意図するところを示してくるものであらう」。

3

よく、この物語の持つ滑稽の要素の一つとして、典薬助が挙げられるが、どのようにして、かれが滑稽の要素（喜劇的人物）になりえているかという説明になると、二日目の夜の大失態、すなわち、錠をかけた落窪の前で、すっかり冷え切って下痢粗相し、ほうほうの体で姿を消して行くばあいの露わな描写そのものが、当時の文章にはみられない、しかし現実には十分あり得るという、粗野かもしれないが健康な笑いに、まず指を折る。さらに、そういう失態が同情を買うどころか嘲笑されるに至っては、それなりの事情があるわけで、継母の側に立つ、いわば悪役の代理人の失敗であること、姫君とは不調和な老齢を掲げて言い寄ることなどが挙げられている。

ところで、典薬助が笑われなければならない理由はそれだけであらうか。それだけとするならば、『住吉物語』の主計頭と同じ条件しか持ち合わないことになる。

まわり道ではあるが、『住吉物語』の主計頭について知識を整理しておこう。

ままははのうへなをやすからぬ心ちしてかのむくつけ女にささめきける。いかならん下すにもぬすませばやとおもふといへば、むくつけ女うちあみて、わらはがあにに候もの、かすへのかみとて、とし七十ばかりなるをきなの、めうちただれてよにおそろしげになむ。このとしごろめのあまにおくれて侍るをかたらひ候はんとおもふなりといへば、返てうれしくなん。いひあはするかひありてはからへばよろこびてといひて、とくとくとてかしこにいひて、しかじかときこゆるに、はもなきくちにてあみまけて、あなうれしや／＼といふ。

古典文庫本『住吉物語』の校者磯部貞子氏の所説にしたがって、蓬左文庫本が大略平安朝当時の『住吉物語』に近いものとするならば、主計頭は年七十、目はただれ、齒は抜けて全くの老人である。にもかかわらず、かれは、最近妻の老嫗に先立たれた淋しさまぎれに、姫君を与えられると聞いて喜色満面の好色人なのである。

『落窪物語』の典薬助も、みずから「翁」といい、「目くそ閉ぢあひたる払ひあけて、腰はうちかがまり、」前に述べた三日夜の失態について、「老のつたなかりけること」と弁解していて、かれが落窪姫君とは不調和な老人であることは明白なのであり、人物設定においては共通基盤があるように思われる。ただ、「主計頭」を「典薬助」に改めていることは注意されなければならないと思うのである。例えば、女主人公姫君（継子）の父が共通して

「中納言」であることには、中納言という官位が、権門に親しい中流貴族に就ては、極官に近いという官職意識が底流しているからであろう、と同様に、主計頭を他の官職でなく典薬助に置き変えたことには、ここにもまた作者の官職意識が働いていて、この官職意識と、『住吉』にはみられなかった喜劇的なシチュエーションが落窪に予定されていることとの間に深い関連を見出せるからである。

というのは、『住吉物語』では継母の奸計が洩れて姫君に知られ、姫君は「故宮の乳母子なりける女房の、宮におくれ奉りて、尼になりて、住吉に侍りける」人のもとへ難を避けることになるのだけれど、『落窪物語』のばあいは、いかにも「典薬」助らしい接近に気をもみながらも、とんだ失敗を助がしたために姫君は厄を逃れているのである。阿漕から内密に知らされた姫君が「いかでただ今死なんと思ひ入るに、胸痛ければおさへて、うつふし臥して泣くこといみじ」く、そこへ北の方が来て、「いとしたしや、なかくは宜ふぞ。」姫君答えて「胸痛く侍れば。」北の方重ねて「あないとはし、物の積かよ。典薬のぬし医師なり。かいさぐらせ給へ。」姫「何か。風にこそ侍らめ。医師いるべき心地し侍らず。」北の方「さりとて胸はいと恐ろしきものを」と応答が重ねられ、典薬助が登場すると、「ごに胸の悩み給ふめり。物の積かとかいさぐり、薬なども参らせ給へ。」と北の方は言い残して退場する。悪役の選手交代なのだが、後は、「医師なり。御病ふとやめ奉りてむ。今宵よりは、一向にあひ頼み給へ。」「いと頼もしきことなれど、ただ今更に物なん覚えぬ。」「さや。なとか思

すらん。今は御代りに翁こそ病まめ。」という具合の、助と姫との対話となる。姫がつぶれるほどに胸を痛めたのは心理的原因による。ここにあるものは、それを生理的なものに受けとって、医師の地位を利用して近付けようとする北の方の奸計であり、北の方の意を受けた典薬助が姫のことばを都合よく解し、あまつさえ「翁こそ病まめ」などと甘いことばをまじえて近付こうとする年齢に似合わぬ助のいやらしさである。この人物配置において助が「典薬」助であることの意味は非常に重く大きい。もし、典薬でなかったら、他のどのような官職を当てても、このように自然に近付くことはできない。筋がリアルに進展しないことだろうと思われる。

物語に話を戻すと、助の典薬ぶりはなおも続く。「典薬や入りぬらん」と姫君の上を案じて駆けつけた阿漕の、「今日は御忌日と申しつるものを、心憂くも入り給ひにけるかな。」という、一策を含んだ詰問に、「何かちか／＼しくあらばこそあらめ。御胸まじなへと、上（北の方）の預け奉り給ひつるなり。」と答える典薬はまだ装束も解かずにいることを証拠に、「典薬」の地位によって自己弁護——自分の魂胆を隠蔽しているのである。

阿漕の機智で温石を取りに行かされ、拾って戻れば御忌日だからと体裁よく拒まれ、翌朝文を阿漕に托せば少将の文を手渡すために逆用される。その日も暮れようとするころ、阿漕に姫君の様態を聞き、「いみじくなむ悩み給ふ」との返事に「いかにおはせむずらむ」と「我がもの顔にうち歎く」この助は、職権を悪用する奸智の持主というよりは愚直な感じをさえ与える。好色ではあ

るけれど人は良い。二夜目も失敗する。失敗も失敗、姫君と阿漕との万全の準備に、押せど叩けど開かばこそ、落窪の前に頭張り抜いた結果は、冷えに冷えて、「腹ごはとはと鳴」り、「しひてごはめきて、ひちひちと」音を立てる始末に、「かい探りて、出でやするとて、尻をかかへて惑ひ出づる」例の余りにも有名な大失態である。

翌けて、阿漕から昨夜の一部始終を聞いた帯刀は、「いみじきことにあはせて、ひりかけの程をえ念ぜで笑」ったというし、二条殿に救い出されての後に道頼も「かのひりかけのことをぞいみじく笑ひ給ひ」、あまつさえ、「不覺なりける御懸想人かな。北の方いかにあさましと思ひ給はん」と語っている。繰り返し、かの夜の失態が笑い草に供せられているということは、作者の得意もまたこの場面の独創にあったといつてよいであらう。

この笑いはすでに指摘されているように、『今昔物語』巻二十八「彈正弼源顯定（年三十四）を出して咲はるる語」や『宇治拾遺物語』巻五に記載する堀河院の陪従家綱の弟行綱が、袴を高々とかがけて細腰を出し、「よりによりに夜の更けて さりにさりに寒きに ふりちうぶぐりを ありちうあぶらん」と詠いながら、寒々しい素振りもおかしく庭水を三度まで走り廻って、天皇以下居並ぶ貴紳の喝采を受けた落窪の心にも通じようし、『落窪物語の笑い』長谷章久『国文学』(昭和三十三年三月)、『外記の放った一発に皆笑いころげたという「大鏡」(時平伝)の記述なども思い合わせると、一皮むいて人間の真実を露見してみせる、あるいは表面を取澄ましている宮廷生活の固苦しさを打破る野趣に、下賤かも知れないが健康

な笑いを誘おうと意図したものであったともみられるが、ただそのような単純な笑いだけとも思われない。

「典業」という地位を利用しようとした難母の奸智が極く自然に屠り去られて、それまでの極度の緊張から解放された笑いであり、また、現今でも巷間耳にする俚諺「医者の不養生」と同じ意味で、人もあろうに典業助が下痢を起したことへの揶揄諷刺の心が、そこには籠められているのである。

また典業助の来ることを、「典業さわたれば」(二一六頁)といつて、谷蟬などのばあいには使う動詞で表現していることに注目して、これも典業助を滑稽人物として印象づけるための一手法であったとするみかた『春田宣「落窪物語」ノート「文学語学」6』もたしかに作者の意図を指摘して正しいと思われる。なぜといえは少し前の個処で「口は耳もとまで裂け」(二一〇頁)という容貌描写をした根底にも谷蟬が何か、むくつけき下等動物のイメージがあったと思われるからであるが、これもいわば知的な笑いであり、これまで述べたようなわけで「典業」助という官職のゆえに、かれの振りまく滑稽感倍加していると思われるのである。『住吉物語』の、主計頭から脱れた姫君に寄せる同慶の情はすこぶる単純なものであるけれど、『落窪物語』の姫君の典業助の虎口を脱した場面は、同慶の情に加えて笑いがある。いや、むしろ笑いの裡に幕が閉じられるところが適切である。しかも、その笑いは単純な喝呼話の伝統を破る知的な笑いなのである。

後に、光源氏に言い寄られた藤壺が、気分の悪いことを理由にして、その場の難を避ける場面もあって(若紫)、身体具合を

理由にして、好ましくない男性を拒んだらうことは、当時の生活にもしばしばあったことなのであろうけれど、『落窪物語』の作者が『住吉物語』の「主計」頭を「典業」助に置き変えたとき、典業助でなければ賣せない効果を計算してあったものとみてよいだろう。こういう推論の一つの傍証として、『今昔物語』巻二十四「女行・医師家・治癒迷語」を挙げよう。医師としての技倆と交換に女の歡心を得ようとする好色な医師と、その裏をかくて、みごと好色のわなから逃げ了せた女とを描くこの話にも、『落窪』の典業助のばあいと同質の笑い声を聞くことができる。医師の立場を利用して、しかも失敗する奸智姦計を諷刺揶揄する、知的な笑いが当時あったものと思われる。

だが考えてみれば、こうした知的な笑いは何も『落窪物語』に始まったものではない。『竹取物語』の五人の求婚者の中のある者の賣す笑いが、壬申の乱の勲功者を連想することによって、それだけ複雑な笑いになっていることは周知のことであるし、『宇津保物語』の御春高基や滋野真菅の醸し出す滑稽感が、時人の氏姓意識を基盤に置くことによって、複雑な知的な笑いとなっていること、嘗て指摘した通りである『拙稿「御春高基と滋野真菅とをめぐって」』『国文学研究』第十九集昭和三十四年。

なお、今一人の喜劇的人物である「面白の駒」の命名が、「面は白きものつけ化粧したるやうにて白う、鼻をいらかし、さし仰ぎてい」る容貌・情態によるだけでなく、「面白」に「笑」の意味を認める見解が示され『久松潜一博士「古代文学に於ける美の類型」』『日本文学史総説年代』所収)、また古く「阿漕」の命名は、

「三の君の方に、ただめしに召出る事の、度かさなる」ことから、『古今六帖』の「逢ふことをあこぎが鳥に引綱のたび重ならば人も知らなむ」によるとする説が『落窪物語証解』(巻の一)にみえる。阿説ともに信ずることができると思うが、所説の通りだとすれば一は懸詞により、他は引歌による知的な命名で、典業助のばあいと共通するものがあるように思われる。

4

以上で人物設定の方法についての検討を終るわけであるが、これまでの比較において、『宇津保物語』についてはすべて除外してきたのであるけれど、忠こそはあいは継子が男子であるという点で諸他の継母子譚と性格を異にするし、何といっても忠こそは物語は諸他の物語や民話のような継母子の悲劇ではないので、本質的に比較の対象にならないのである。したがって、今、忠こそは実母が一世源氏で継母より出自が高いといっても、継母が忠こそに辛く当る理由は『住吉物語』や『落窪物語』のばあいと異り、継母の愛を忠こそが受けないためと物語中に明記されているのである(「忠こそ」)。ただ、忠こそをめぐる継母譚の展開方法は『落窪物語』と深い類似を示していることは注目しなければならぬ。

二の 1

『落窪物語』の方法の第二として、構造の面から、民話克服の態度、『住吉物語』との関係などをみよう。

「昔話の主要な特徴の一つは、構造と表現形式にある」という

《関敬吾民話》二〇五頁。このばあいの「昔話」は本稿でいう民話と同じ意味に用いられているから、民話の特徴をいうものとみて差支えないのであって、上記のことを少し具体的にいえば、「語り手は構造を自由にかえることも、表現形式の一字一句といえども自分の想像力を加えて、変更することはできない」のであって「聴き手もまた古い語り方になれ、伝統的な表現形式を忠実にまもるものを優れた語り手と考え」ていたというのである《関敬吾前引書同頁》。だから、本質的には民話の構造からの脱皮変化を図るところに、仮作物語の民話に対する特徴があるということができるのであって、周知のように、『竹取物語』のばあいなど極めて端的にその間の事情を物語っている。ただ「昔」という語り起しで時代設定をはかしてしまふことや、間接語法で語り続ける叙述様式などは明らかに民話の物語文学に対する根本的な影響であり、さらに古物語の特徴といわれるハッピー・エンドの技法も享受者の側に立つて考えれば、これに当てはまらなければ優れた物語と考えられなかつたろうという意味で、一つの固定した様式として、民話の影響を受けているということもできる。また個々の事実としても、素材を民話に得たろうことは指摘するまでもなく豊富で、『落窪物語』のばあいにも、手無し娘系の民話で、旅先の夫と取交した手紙を継母に見つけられて書き換えられた事件が、阿漕が典薬助の文を渡すと見せかけて、北の方の目をごまかし、少将からの手紙を姫君に渡す構想に生かされているなど、このようにみえてみると、民話と物語文学との浅くない関係を知るこ

とができる。

2

ところで『落窪物語』の内容については、巻別意識を検討した上で四部に分つもの《奥山菅男「落窪物語」の巻別意識》『平安文学研究』第十七輯、これとやや見解を異にする部分があるが、野口元大「落窪物語論覚書」『日本文学』一九五四・四などや、分け方はちがうけれど、三部構成とみる阿説《石川徹「落窪物語」の構成》『古典研究』後「古代小説史稿」所収 西下経一博士「日本文学史第四巻」などがある。そして各部の評価についても、第一部が、「文芸的に見て最も重要な部分で、継母の邪悪や可憐な姫君のことが十分に記述されてゐる。継母に対する報復以下は継子物語としては必要であるかも知れないが、情中心の純文芸的な物語としては必要のない部分である」《西下博士前掲書》という見解、「物語のプロットは最初からほぼ見通され野心的な開拓が試みられた形跡はない」《野口元大前掲論文》として暗に第一部に比重を置くものがあれば、反対に報復譚・後日譚の部分に落窪物語の特殊性を指摘する説《奥山菅男前掲論文》もある。末尾についても「落窪」の特性として認めようとする説のある反面、蛇足と貶した藤岡作太郎博士説以来、作者別人説《筑土曙生「落窪物語」の成立過程》『東京女子大日本文学』第五号）同一作者によるとみる説《野口元大前掲論文》など成立問題とも絡んで種々である。

今、民話が三段の構造によって組立てられるとき、事件も発端・

経過・結末の三段階に發展するという説《関教吾前引書一三七—八頁》にしたがえば、『落窪物語』の巻一は主人公の處待を受けることといい、阿漕という忠実な侍女の活躍といい、道頼の愛情の出現といい、正しく民話の発端、経過の段階を網羅するものであつて、民話の筋書をそのまま移した構造である。しかし、結末に当る部分を巻二以下に譲つて報復譚・孝養譚としたということは、本来の民話なら叙述の分量からいって、最も簡単に済むはずの部分をも大に引伸ばしたのであるから、これまでの民話にも、『住吉物語』にも試みられなかった、いわば作者の独創的構想の所産であることを示すものであらう。というわけで、稿者も結論的にはこの物語の中核は巻二以下にあるものとみるので、ここに巻二の構造を中心にやや詳細に検討しよう。

3

第二部における報復の開始は

いつしかぬすみ出で奉りて、この北の方（継母）の答せんと
なむ君（道頼）は宣う（二二五頁）

という帯刀のことばに予告され、

1 北の方たちが石山詣の留守に道頼の手で姫君が二条院に救出されることで実現の第一歩を印するのだが、（二三〇頁）以下報復事項を列挙すると、

2 少将道頼が四の君との縁談を引受ける。

かの少将は北の方いとねたく憎くて、いかでこれにわびしと思はせんと思ひしみにければ、心の中に思ひたばかるやうありて、

よかなりというなりけり（二三四頁）

3 面白の駒の身替り結婚。

女（四君）いかが思はんと思へども、（北の方を）まさりて憎しと思しおきてければなりけり（二三八頁）

4 疾くいかでこれが報いせんと思ひし程に迷げて後に引かへてかへりみんと思すこと深くてなりけり（二四一頁）

5 面白の駒の後朝の文に落胆。

死ぬる心地すること、かの落窪といふ名聞かれて思ひし程よりもまさる心地すべし。北の方のうち見てあやしう……いかならんと胸つぶれぬ（二四一頁）

6 面白の駒との結婚を悔む。

（北の方）「あたらわが子を何のよしにてか、さる者にくれはてん」と惑ひ給へば（二四六頁）

7 三の君の夫藏人少将、面白の駒のために恥をかく。

「面白の駒はいかに……白馬に出だし給へ」……（二四七頁）

8 帯刀、面白の駒のことを愉快がる。

「あないとほしや、北の方如何思すらん。さいなまるる人多からんかし」といふ。（二四八頁）

9 藏人少将と三の君と離婚。

かの北の方、これ（藏人少将）をいみじき宝に思ひて、これがこにつけて、わが妻を懲ぜしぞかしと（道頼が）思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。（少将三の君を離れ）よしと褒めし装束もすぢかひあやしげにし出づれば、いとどここつけて腹立ちて（二四九頁）

北の方、落窪のなきをねたういみじう、いかでくやつのためにいまはしきしるく見せんと惑ひ給ふ。我は幸あり、よき聲取ると言ひし効なく、面起こしに思ひし君は、ただあくがれにあくがる。よきわざしていそぎしたる（面白の駒）は、世の笑はれぐさなれば病人になりぬべく歎く（二五〇頁）

かかるままに北の方いられ惑ひて、物も安く食いでなん歎きける（二五八頁）

10 清水詣の車争い。

北の方「何の仇にて、とにかく恥を見せ給ふらん。この兵部少輔のこともこれがしたるぞかし。……よそ人もかく敵のやうなる人こそありけれ。何者ならん」とて北の方手をもみ給ふ（二五二頁）

11 清水詣。局争い。

下りなと思ひて、六人まで乗りたれば、いと狭くて身じろぎもせず。苦しき事落窪の部屋に籠り給へりにもまさるべし（二五五頁）

12 二条院北方祭見物に誘われる。

かの石山詣の折、一人えり捨え給ひしも思ひ出でられて心憂く（二六九頁）

13 道頼更に報復の意志を示す。

さは思すべけれども、なほ念じて、な知られ奉りそ。知られて後はいとほしくて、え北の方懲ぜじ。今少し懲ぜんと思ふ心あり。またまろも今少し人々しくなりて。中納言はよもとみには死に給はじ（二七一頁）

14 藏人少将出世し、中納言は侮られる。

衛門督……中納言殿を吹く風に付けても侮りて懲じ給ふことも多かれど……

15 三条邸の奪取。

16 賀茂車争い。

（道頼は）よそ目はさま恐ろしきものに、世に思はれ給へれど、実の御心はいとなつかしう、のどかになんおはしける（二七五頁）

「いかなるものの報いにてかかる目見るらん」

あの北の方はいみじう病み苦しがる。御子ども集まりて願立てなどして、やめ奉りけり。（二七九頁）

4

こうして本文を引抄しながら列挙してみると、構成論的には、周知のことではあるが、第一部の加虐に対する整然とした対応に気付く。

例えば、姫君を典藥助に与えようとしたことに対して2・3・4と続く面白の駒の身替り結婚は考えられているし、継母が姫君を「落窪の君」と呼ばせて恥かしい思いをさせたことに対しては5・7が用意されている。（「落窪の君」の呼称の与えた恥かしさは一九七頁などに明白である）。姫君に昼夜兼行で裁縫をさせ、道頼来訪の折にも出来が遅いといつては口汚く罵る場面には、9や同じ藏人少将の衣服を縫いながら今昔の感に耐えないでいることを描き、落窪に押籠めたことに対しては11が用意されており、

12で道頼母子から受ける信愛の情は石山詣に一人残されたことに対応し、逆説的な報復である。その他、色々拾い出して行くと、殊更第一部を意識して第二部で報復していたことが分る。

5

また、各報復の事実は、藏人少将の困惑(7)も中納言の驚駭(15)も、三の君の悶愁(9)も、四の君の迷惑(3)も究極には北の方を口惜しがらせるように意図されていることが分り、(2・5・8・9・10・13・16)「北の方……」と言及しているのはその現われだろう。父中納言・藏人少将・三君・四君など巻き添えのため直接被害を受けた人たちが、道頼の手でそれぞれに慰められ、落着いていくのもその証であろう。典薬助と面白の駒といわれる兵部の少輔だけは、車争いに蹴られたのが原因となって死んだり、世から身を退いてしまったり、最後まで無残で物語の結末の孝養譚にもかかわらず、道頼の性格に言い知れぬ抵抗を感じたわけだけれど、この二人は全く手段に使い果してしまつて、作者自身でも救拯の路を考えきれない、いわば持て余していたのではなかったか。孝養譚とこの二人の扱ひ方は矛盾を孕んでいるのであって、端的にいつて、場面の面白さを盛り上げるために効果はあったが、全体の見通しを持たない構想力の弱さを露呈したのである。そうした失敗は失敗として確認し、翻つて、一見報復が對手構わずのようであっても、よくみれば北の方一人に帰納して行く叙述の方法は、民話において悪役のうける懲罰の伝統を根底に踏まえながら、懲罰を報復譚として拡大する新しい試みとし

て作者の創意をそこに認めなければならぬことだろう。

姫君の諫めを容れず四の君との縁談に應ずる条に、「かの北の方にいかでねたき目見せんと思へばなり」という少将の弁明があり、すぐ続いて、2に記した地の文がみられる。こうした、重複してまで説明のこぼれを挿むことの不手際も、その原因は報復譚が作者独創の部分であるがために力余った筆の走り過ぎとみられる。

6

最後に孝養譚との関係を考えてと、すでに述べたように累を及ぼしたものの皆を慰める意味で、巻三・四の両巻はともに報復を描く巻二と密接な関係にあるもので、蛇足ともみられる巻四執筆の直接の動機は巻二にすでに胎動していたとみるべきであろう。具體的にいえば、4のように数々重ねる報復の煩わしさを弁解する作者は、

人に誉められ、帝もよき人に思召したれば、ましていかならんことをし給ふとも宜ふまじ(二四八頁)

とか、

よそ目は様恐ろしきものに、世に思はれ給へれど、実の御心はいとなつかしう、のどかになんおはしける(二七五頁)

あるいは、清水詣の局争いの後、帰邸した北の方の「この大殿の中將(道頼)はおとどをや悪しくし給ふ」との問いに、

さもあらず。内裏などにも用意ありてこそ見ゆれ(二五六

頁)

と中納言をして答えさせたり、父中納言を慕う女姫に向つて、13で「中納言はよもとみには死に給はじ」などと道頼の人間像、特に中納言に対する感情を補足するような説明を施していることを思い合わせると、報復譚と孝養譚の深い脈絡、さらに、孝養譚として一括される巻三と四が同じ構想圏内のものであることも明白になる。

7

こうした『落窪物語』の構造上の特色は、『住吉物語』にはみられなかった。そこでは継母の零落という形で懲罰は表現され、民話の型を踏襲して結末に置かれてゐる。『落窪』が巻数を四巻に増大している形態上の差からしても、直ちに分るように構造上の問題でも『住吉』を克服した跡は著しい。むしろ、ここでは『宇津保物語』の忠こそその物語と同様中篇化しているのである。というのは、忠こそそのばあいも「忠こそ」巻で発端と経過が語られ、結末を後の「吹上(下)」巻に譲つて似てゐるからである。

三 結 び

こうみてくると、作中人物像の形象においても、物語の構造においても、旧来の継母子譚、特に文学史的には直接すると思われ『住吉物語』の克服に作者の努力は払われていたことが分るのである。極言すれば『住吉物語』克服の方法こそ『落窪物語』の方法だともいえるようである。

小鳥とか亡霊とか、超自然なものによつて継子が助けられるところを、住吉の厄という人間によつて自然な筋の運びの裡に救わ

れるように置き換えた点に、姫話(あるいはそれに準ずる古物語)を揚棄した『住吉物語』の功があるとすれば、民話にも『住吉物語』にも簡単に記された天意による懲罰を報復譚として成長させ孝養譚を附加して、人生をより複雑な変転の中で、全円的に描こうとしたのは『落窪物語』の独創的方法であつたと結論づけることができよう。そのような民話の一層の超克——その野心こそ、この物語の直接のモチーフでないかと思われ。

ただ、そのように構造の上で進化の跡の著しい割合には、この物語が広く読まれなかつたのは、松尾聰博士もいわれるように、「洗練された貴族にとつて継子物語は『心見えに心づきなし』(源氏物語)と考えられたから」(『日本古典文学大系』『落窪物語』解説)であらうし、また、たまたま物語中に、新しい思想として一夫一婦主義を挙げ、二婦を持つことすら古いものとしての結婚観や、一夫一婦を強調するの余り、落窪姫君の他にさらに右大臣の女を妻に迎えることを「物狂し。帝の御女賜ふとも、よも得侍らじ。」(二六七頁)という態度が涼・仲忠優劣論において「帝の御女や得たる。」といった仲忠側のことばに窺はれる女房一般の思想・生活態度のちがひなども考えられるけれど、本稿で取上げたような物語創作の方法が余りにも知的で加筆介入の余地のない点に、より大きな理由を見出すことができるのではなからうか。それらについては続稿に譲りたいと思う。

(附記) 本稿は昭和三十五年度文部省科学研究費(総合研究)による研究成果の一部である。